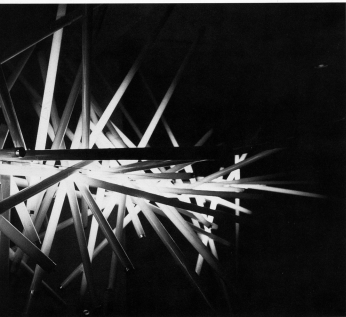


GALLERY SURGE + AKIYAMA GALLERY PROJECT

ARICHI
Soichi
+
SASAOKA
Takashi

LUMINOUS 1994
22 Aug - 3 Sept 1994



LUMINOUS 1983/PERFORMANCE キャラリーサーフ



往還する光

箱の底で蛍はかすかに光っていた。しかしその光はあまりにも弱く、その他はあまりにも濃かった。僕は最初に蛍を見たのはずっと昔のことだったが、その記憶の中では蛍はもっとくっきりとした鮮やかな光を夏の闇のなかに放っていた。僕はずっとと蛍というのはそういう鮮やかな燃えたつような光を放つものと思い込んでいたのだ。(村上春樹『ノルウェイの森』③p84)

私達は日常生活の中で、たくさんの照明に照らされている。眠るとき以外は、昼と同じような明るさの中で過ごすことがほとんどだ。しかし、光の強さ、明暗を気にすることはあっても、光の質の違いや時間の経過にともなう光の変化に気づく機会はほとんどない。有地+笹岡がこのところ作り続けている作品は、光の質とそれを見つめる時間を意識化することを通じて、私たちが通常忘れていた光に対する感覚を呼び覚ます「装置」でもある。

1992年の暮れに発表した「ルミナス1992」（集雅堂ギャラリー／大阪）は、48本の蛍光管を整然と床に並べ、それに通常よりも低い電圧を流して、蛍光管を明滅させるものであった。そのとき、古くなった蛍光管がそうなるように、管を輪切りにするような小割みに震える縞模様が生じる（この現象は「ストライエーション」と呼ばれているという）。この作品の前で私たちは、アトランダムに点灯する蛍光管の光を待って、通常たんなる照明器具としての機能ばかりに注目していた蛍光灯の白い光を、飽きもせず見つめ続けることになる。

「ルミナス1992」は、半年後に「ルミナス1993」として、東京（ギャラリーサージ）でも発表されたが、この間に有地+笹岡は「リフレックス」（イトーキクリスタルホール／大阪）という作品も作っている。これは、ミラーボールに強力な光を当てたもので、私たちが光源を見つめることを許さないような作品だった。しかし、ミラーに照らし出された鑑賞者の影が会場の周囲にある薄いカーテンから透けて見える仕掛けに、一見ミニマルな造形表現の中に余情性を加えることを怠らない彼らの美意識がうかがわれた。

次に彼らが試みたのは、電線を使わずに蛍光管を点灯させる作品であって「ルミナス1993」として集雅堂ギャラリーで発表された。これは管の外側からであっても高周波を当てると蛍光管が点灯する仕組みを利用したもので、同じ原理は、たとえばピョートル・コヴァルスキーも作品に取り入れている。しかし、コヴァルスキーが、蛍光管を鑑賞者ひとりひとりに配って、この原理そのものを彼らに体験させ、目に見えないものの（この場合は高周波）の存在を実感させることを主題にしていたのに対して、有地+笹岡は、原理は既知のものであるという前提の下で、無電線照明の利点を生かして、ありふれた蛍光管を日常生活では想像できないように自由に組み合わせた造形的な作品を作った。

ここまでで、彼らが個々の作品タイトルをシリーズ名に負わせていることに気づくだろう。つまり、ほぼ同じ材料・方法を使っている「ルミナス1992」と「ルミナス1993」（サージ）は作品名としては違っているし、逆に「ルミナス1993」は同名であってもストライエーション版と無電線版がある。こうなるのは、有地+笹岡の作品が、彫刻台の上や額の中で自立して成立する種類の静的な作品ではなくて、「場」との関係でそのつど変化する作



REFREX 1993 イトーキョウリスタルホール

品であるからだ。ここでいう「場」とは、実際の物理的な場所を指すのはもちろんであるが、それがそこに設置された絵画やその作品を味わおうとする鑑賞者たちの意識の流れを含んだ一回性の空間のことだ。このような「場としての作品」という意識があるから、物としての作品を特定する個々の作品タイトルはあいまいにしてあるものと想われる。私が「ルミナス1992」のカタログのなかで「彼らは物質を用いて空間・時間の『場』を提示するのだが、それを〈作品〉として仕上げるのは、その『場』をたんなる虚空ではなく、意味ある時空として開く観客なのである」（『LUMINOUS 1992 集雅堂ギャラリー』）と言ったのは、「場としての作品」という性格を意識してのことだった。

ところで、あるエンジニアが言っていたことだが、彼は実のところ、消費者のニーズや会社の方針に沿って新製品を開発しているわけではなく、自分が作ってみたいものを作ってから、それを会社に「商品」として説明するために、その用途や利点を後から考え出しているのだそうだ。有地+笹岡の作品制作の根本的な動機も彼と同じだと思う。思いついたものが実際にはどう見えるのか、見てみたい—そんな視線の欲望が作品制作の根本的な動機であろう。

しかし欲望という私的なものから出発しながら彼らの作品が独善的な表現になっていないのは、個と個、個と他者との間で意識を交感しながら作品を制作しているからだ。ここで言う個と個とは、もちろん有地左右一と笹岡敏のことである。

私たちは「芸術」というと、とくど特異な自我（それもたいていの場合は病んだ自我）といささかの技量を天から授かった“孤高の天才”の技だと思ひ込みがちだ。だが、いささかでも技量のある人間の独自の表現ならばだしも、病んだ自我の勝手な暴発は、それが理論的であろうが表現主義的であろうが、他者にとっては迷惑なものだ。むしろ作品制作には「個を無自覚のままいたずらに主張するのではなくもう一度捕らえ直す作業が必要」（笹岡「コラボレーション考」／『A&C』No.13）なのである。その点、彼らは二人とも、他者と自分との間の意識のフィードバックができる力量をもった作家なので、個の欲望を作品表現にした場合、それが他者にどのような効果をもたらすかを、造形的な完成度を含めて、予想し合いながら制作を進めることができる。こうした過程を経るので、造形的にはストイックな表現物であっても、彼らの「装置」は、鑑賞者の意識を無機的な白い光へ集中させ、自分の心の内部に流れるもう一つの時間を感じさせることができるのである。

有地十箇箇のコラボレーションによせて

作品制作のあらゆる過程で厄介な手続きを必要とする《コラボレーション》という手段を選び取った、有地、彼らにとって、素材の選択という第一歩もまた、単純な行為ではなかったはずである。彼らが対象とするのは、しかし、「水」「光り」といった日常的なありふれたものであった。素材の特異性や強度などの呪縛に依存しないという彼らの真意は、やがて、精妙なコミュニケーション装置としての作品に結実していくことになる。

シリーズ作品「WATER」は、静寂な部屋の中央に置かれた水槽に、光りを照射して、微かな水の波紋が回りに反射する様子を見出させる。また、後のシリーズ「LUMINOUS」は、点滅する多数の蛍光灯を連ねて、非制約的な光の時間を創り出す。

この二つのシリーズは、技法において、大いに異なるのだが、観客が作品から受ける印象は奇妙に共通なものである。静寂に映る、生まれて消える波紋の伊勢、明滅を繰り返す光の舞臺。本来、非制約的な素材が、緻密に組み上げられた装置によって、ゆっくりと形と意味を携えて立ち上がり、われわれの身体を激で、心を慰める。そうしてわれわれは、目前の《誕生と消滅》の密やかなドラマの中で、感覚と記憶の《戯れ》に身を任せるのである。

過剰なまでに制約的な都市の喧騒からこぼれ落ちた、どこかつかつかしい風景。やり場のない日常の緊張と、覆せぬ魂が求め求めるもの。作品と鑑賞者との間に横たわる造形的意義性のその先に、われわれは、物象化された身体が忘れ去った《故障》を見いだす。

刻一刻変化し、光が揺らぐ、薄暗く静寂に満ちた空間。有地十箇箇はわれわれに何も強いることはしない。だがわれわれは、はっきりと思いつくであろう、われわれの心身の深層に、あの《水》がゆっくり流れていることを。そしてわれわれの眼底には、あの《光》の輝く記憶が宿っていることを。われわれは、おそらく、撃退するのにもっとも困難な何物かを、ここで取り戻すのである。

ギャラリー・サージ ディレクター 酒井健一

「LUMINOUS-1994-2」の開催にあたって

2年前前に、たまたま訪ねた名古屋の画廊で観た鉄と光と水の作品。画廊の扉を開けた瞬間、仄暗い、非日常的な異質の空間。目を凝らすと、鉄・光（熱）と水の装置。一見メカニカルな装置に熱と光によって変化する水。不思議にシんと静まった、自分の心臓の鼓動が聞こえるような緊張感のある空間を体験したことがありました。それが菅岡さんの作品でした。水や光を作品に使う場合、様々な使い方がありますが、一つの現象として捉え、ある距離感が感じられたので、抒情的にならずに語るところが好感を持てたのです。

同じ頃、ギャラリー・サージで観たのは、蛍光灯を床に並列させた作品で、空間を感じさせると言うよりは、灯の点滅によって微妙に変化する光が、乾いた時間を感じさせるものでした。

今回「LUMINOUS-1994-2」では、直管の蛍光灯30個程度を構成し、ICを使って光の調を作り出す作品になりますが、作品と観る人のコミュニケーションが重要な相関関係をなすものとなるでしょう。

私は初期の頃から継続的に二作家の作品を観ている訳ではなく、は人の2、3回なので余り過剰な表現は出来ないう上、本来作品に対しては論理的に接するということよりも体感するタイプの人間で、論理はいつも後からついて来るということになってしまうので、とにかく良い観覧会にしたいということ、出来るだけ多くの方が観て感じて下さることを願っています。 1994.6.30

秋山画廊 秋山田津子

GALLERY SURGE

ギャラリーサージ 〒101東京都千代田区岩本町2-7-13渡辺ビル1階 tel.03.3861.2581 fax.03.3861.2582
GALLERY SURGE 2-7-13,NUMAMOTO-CHO,CHYODAI-KU,TOKYO JAPAN Tel.03.3861.2581 Fax.03.3861.2582

秋山画廊

秋山画廊 〒103東京都中央区日本橋本町4-1-12日本橋秋山ビルB1階 tel.03.3241.1616 fax.03.3241.2837
AKIYAMA GALLERY 4-1-12,NIKONBASHI-HONCHO,CHUO-KU,TOKYO JAPAN Tel.03.3241.1616 Fax.03.3241.2837

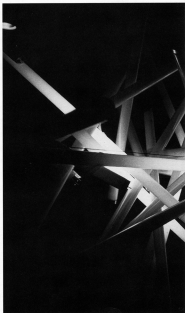
印刷 新聞英社 〒116東京都荒川区西日暮里2-49-5光芸社ビル2F tel.03.3806.5077fax.03.3806.7060
PRINTING SHINKOSHA CO.,LTD.2-49-5,NISHINIPPORI,ARAKAWA-KU,TOKYO JAPAN Tel.03.3806.5077 Fax.03.3806.7060

有地左右一十位同敬 略歴

- 1994 NICAF ノンフィクション
- 1993 LUMINOUS 1993 美術館ギャラリー/大阪
REFLEX イトーキクリスタルホール/大阪
LUMINOUS 1993 ギャラリーサージ/東京
- 1992 LUMINOUS 1992 美術館ギャラリー/大阪
- 1991 WATER 1991 ギャラリーサージ/東京
アルテクトイン大阪西武
- 1990 WATER サベース、ま/鎌倉
WATER 1990 京和画廊/大阪
WATER ギャラリー16/京華
- 1989 WATER 1989 オンギャラリー/大阪
WATER アルティウム/福岡
アートアンドインスタレーション ナウギャラリー/ソウル
うつろいの風景 シニエプラザ/大阪
- 1988 WATER 1988 オンギャラリー/大阪

ARICHI Soichi+SASAOKA Takashi

- 1994 International Contemporary Art Fair,Yokohama
- 1993 Souze-do Gallery,Osaka
Gallery Surge,Tokyo
Izumi Crystal Hall,Osaka
- 1992 Souze-do Gallery,Osaka
- 1991 Gallery Surge,Tokyo
Contemporary Art Gallery,Osaka
Seibu Department,Saitama
- 1990 Souze Mo,Kanagawa
Hiromatsu Gallery,Osaka
Gallery 16,Kyoto
- 1989 On Gallery,Osaka
Art Gallery Artium,Fukuoka
Now Gallery,Soul
Sony Tower,Osaka
- 1988 On Gallery,Osaka



LUMINOUS 1993 美術館ギャラリー